

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	杜甫「返照開巫峡」について
Author(s)	小川, 恒男
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 145 - 156
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051455
Right	
Relation	



杜甫 「返照開巫峽」 について

小川 恒男

はじめに

「返（反）景」「返（反）照」という語が作り出す風景は、例えば『唐詩選』に収める王維（七〇二？～七六一？）や耿湋（七三四？～？）の作が、

返景入深林 返景 深林に入り

復照青苔上 復た照らす 青苔の上

（王維「鹿柴」）

返照入閭巷 返照 閭巷りやうに入り

憂来誰共語 憂ひ来たるも 誰と共にか語らん

（耿湋「秋日」）

と、いずれも「入る」という動詞を用いることからも窺える通り、夕暮れ時の静寂に包まれた薄闇の中に、夕日の光に照らされて突然浮かび上がる、はっとさせられるような明るさに焦点が当てられる。しかし、後述するように、王維や耿湋の「返景」乃至は「返照」の語を用い

た右のような表現は極めて優れてはいても、むしろ少数の側に属する。『唐詩選』の選者の好みを反映した表現と言ってもよい。

この二つの語が表す意味については、既に向島成美氏に『返景』『返照』考（『漢詩のことば』大修館書店一九九八 原載、大修館書店『漢文教室』第一三〇号一九七九）という詳細な論考があり、従来「夕日のてりかえし」というやや曖昧な日本語で理解してきた「返照」が、「夕日の光そのものを意味」とすると述べる。

『唐詩選』には杜甫（七一二～七七〇）の「返照」と題する次のような七律も収める。

楚王宮北正黄昏 楚王の宮北 正に黄昏

白帝城西過雨痕 白帝の城西 過雨の痕

返照入江翻石壁 返照 江に入りて 石壁に翻り

掃雲擁樹失山村 掃雲 樹を擁して 山村を失ふ

衰年肺病唯高枕 衰年 肺は病みて 唯だ枕を高くし

絕塞愁時早閉門 絕塞 愁ふる時 早に門を閉ざす

不可久留豺虎乱 久しく留まるべからず 豺虎の乱

南方実有未招魂 南方 実に未だ招かれざるの魂有り
(杜甫「返照」)

この詩の第3句でも「返照」は動詞「入る」とともに現れる。「翻石壁」については従来大きく分けて二つの解釈が行われ、松原朗氏が『統校注唐詩解釈辞典「付」歴代詩』(大修館書店 二〇〇一)で「諸説の異同」に「A 返照が長江の水面に差し込んで、岸の石壁にきらきらと反射する。」B 返照が長江の水面に差し明るくなったため、水面に映じた石壁の倒影が波に揺れ動くのが見える。」と、A説・B説の二説に分けてまとめる。B説の場合は「石壁を翻す」と訓読することになると思うが、杜甫の同時期の作「月円」の「孤月当楼滿、寒江動夜扉(孤月 楼に当たりて滿ち、寒江 夜扉に動く)」と発想を同じくし、長江の水面に反射した夕日の光、或いは月の光が川岸の石壁や門扉に揺らめきながら映る様子を描写したのではないかと考え、今はA説に従っておいた。しかし、A説に従うにしてもB説に従うにしても、「返照入江翻石壁」は変化に乏しい静的な風景ではなく、第2句に「過雨痕」とあるように、通り雨の後、夕日の光が雲の切れ間からさあーつと長江の水面に射し込んだ、暗から明への変化の一瞬を切り取った情景を描いたものだろう。やはり『唐詩選』好みなのである。松原氏前掲書は「返照」に対して、「①夕日、②夕日の光線、③もしくは太陽が地平線に沈んだ後の夕映え。」(こゝでは第3句『返

照入江翻石壁』において、返照が強い光線であることが示されているから、②の用法であろう。」との語釈を加えておられる。

以下に述べるように、唐詩、取り分け盛唐以降は②の用法が多くを占めるようになり、向島氏が論中で取り上げられた作品群であれば、「夕日の光そのものを意味」するという説明で、ほとんどの場合問題なく当てはめることができる。

王維、耿漳、杜甫の「返景」「返照」は、それまで薄暗かった場所、「深林(青苔)」「閭巷」「江」に「夕日の光」がさつと射し込む様子を「入る」という動詞で表現し、その暗から明への一瞬の変化を描く。同時に、夕日の光によって明るくなる範囲が限定されるので、明と暗との対比が際立つことになる。

杜甫の詩には「返景」の用例が見当たらないのだが、「返照」については向島氏前掲書に『返照』が熟語として夕日の光を意味するようになったのは、やはり六朝後期の頃からだったと思われるし、詩語としての洗練が加えられたのは、杜甫に依るところが大きかったのではないだろうか。」との指摘がある。本稿では、杜甫がどのような洗練を加えたのかについて、もう少し検討を加えてみることにしたい。

一 杜甫前後の「返照」

実は杜甫よりも早く「返照」の語を用いた唐代の詩人

はそれほど多くない。初唐では駱賓王（六四〇？～六八四？）が、

返照下層岑 返照 層岑に下り
物外狎招尋 物外 招尋に狎る

（駱賓王「夏日遊山家同夏少府」）

返照寒無影 返照 寒くして影無く

窮泉凍不流 窮泉 凍りて流れず

（駱賓王「樂大夫挽詞五首」其二）

と二箇所で用いているのが見受けられるくらいである。駱賓王は「重なつた山々に夕日が沈む」、「樂大夫の死を悼んで夕日も寒々として光を失つたかのようだ」と、二首とも「返照」を夕日そのものの意で用いるようである。次に挙げる孟浩然の用例は、杜甫にやや先行するだろうか。

翠微終南裏 翠微 終南の裏
雨後宜返照 雨後 返照に宜し

（孟浩然「題終南翠微寺空上人房」）

駱賓王とは異なり、孟浩然の「返照」は夕日の光を意味し、終南山の懷に抱かれた翠微寺を鮮やかに照らし出す。杜甫の「返照」詩と同じく雨上がりの夕焼けの美しさを

描くと思うが、暗から明への変化に着目したものではま
だなく、空上人が俗塵から隔絶した清浄な地にいること
を強調するための表現だろう。孟浩然の作には、

夕陽開返照 夕陽 返照を開き
中坐興非一 中坐 興 一に非ず

（孟浩然「登江中孤嶼贈白雲先生王迥」）

と「返照」がもう一例見られるのだが、「開」を「門」に
作ったり、「返照」を「晚照」に作ったりするなどテキス
トに異同が多いので、ひとまず考察の対象から外してお
きたい。

次に挙げた李頎（六九〇？～七五三？）の作は杜甫と
ほぼ同時期のものと見ていいだろう。

菓草空階静 菓草 空階に静かに
梧桐返照寒 梧桐 返照に寒し

（李頎「聖善閣送裴迪入京」）

この詩も『唐詩選』に収める。「芍菓の植え込みは人氣
のない階段の下でひっそりとして、アオギリの木は夕日
の光に照らされてひんやりと立っている」と、裴迪との
別れが芍菓が枯れてしまう冬の寒々しい夕暮れ時のこと
だったと詠う。李頎の「返照」も夕日そのものではなく、
夕日の光を表す。「梧桐」が夕日の光を浴びているけれど

も、明と暗との対比に主眼を置くのではなく、辺りが次第に暮れていく中、真つ直ぐに立つ梧桐の寒々とした姿を描写して、自分自身の心情を婉曲に表現する。

次の劉長卿（七一八？～七九〇？）と皇甫曾（七二一～七八五）の作は杜甫よりやや遅れる。

荒村帯返照 荒村 返照を帯び

落葉乱紛紛 落葉 乱れて紛紛たり

（劉長卿「碧澗別墅喜皇甫侍御相訪」）

返照寒川満 返照 寒川に満ち

平田暮雪空 平田 暮雪 空し

（皇甫曾「過劉員外長卿別墅」）

「皇甫侍御」は皇甫曾。二首は同時の作である。儲仲君『劉長卿詩編年箋注』（中華書局 一九九六）は大曆十（七七五）年に、楊世明『劉長卿集編年校注』（人民文学出版社 一九九九）は大曆十一年に編年する。どちらの「返照」も夕日の光の意である。皇甫曾の詩は五十首前後が現存するに過ぎないが、夕景を好んで描いたらしく、「返照」の語が右の例だけでなく、

返照空堂夕 返照 空堂の夕べ

孤城弔客迴 孤城 弔客 迴る

（皇甫曾「哭陸処士」）

返照城中尽 返照 城中に尽き
寒砧雨外聞 寒砧 雨外に聞こゆ

（皇甫曾「秋興」）

の二例があり、「返景」の語も一例見られる。

細泉松径裏 細泉 松径の裏

返景竹林西 返景 竹林の西

（皇甫曾「題贈吳門邕上人」）

改めて調べてみると、唐詩に於ける「返景」も王維以前では宋之問（？～七一二）の、

是日濛雨晴 是の日 濛雨 晴れ

返景入巖谷 返景 巖谷に入る

（宋之問「温泉莊臥病寄楊七炯」）

という例くらいしか見当たらない。「今日この日、長雨もようやく上がり、夕日の光が陰しい谷にも射し込んで来た」と、宋之問も「返景」を「入る」という動詞とともに用いて雨上がりの夕景を描くが、風景の捉え方が巨視的である。王維の「返景入深林」と字句は似通っているものの、温泉莊の清らかさを強調するあたり、むしろ孟浩然の「題終南翠微寺空上人房」の方に情趣が近い。

初唐の駱賓王から中唐の劉長卿、皇甫曾までの作を順に見てみると、いずれの「返照」も「はじめに」で言及した王維、耿湋、杜甫のような光と影、明と暗を対比することで生じる鮮烈なイメージを伴わない。杜甫よりも少し遅れる劉長卿の「荒村帶返照」は耿湋の「返照入閭巷」に雰囲気が似通い、皇甫曾の「返照寒川滿」は杜甫の「返照入江翻石壁」と同じく川面に映る夕日の光を描く。しかし、彼らは日が沈もうとする頃、周囲がだんだんと暗くなつていく様子を淡々と描くばかりである。もちろん、このような静謐な夕景の描写にも水墨画を見えるような枯れた味わいがある。むしろ彼らの狙いはそこにあつたのだらうと思う。皇甫曾が劉長卿の別墅を訪問したのが雪が溶け残る初冬の頃だつたこともあり、色彩感がやや乏しいのも当然だらう。

予想よりも用例数が遙かに少なく、どれほどの蓋然性が認められるのか些か心許ないが、やはり杜甫以前と杜甫以後とは詩に現れる「返照」の語には違いがあるのではないだらうか。まず、杜甫以前では「返照」の用例そのものが稀であり、杜甫の前後から次第に増えていく。少なくともそのような傾向を認めてよいだらう。このよきな量的変化だけでなく、駱賓王の「返照」が夕日そのものの意であつたのが、孟浩然以降は夕日の光の意で用いられることが多くなり、夕日の光が照らす対象を描くようになるという質的变化も認められる。夕日の光にてらわれる対象が比較的広い範囲に及ぶ場合、例えば「荒

村（帶）」「寒川（滿）」などの場合は、作中人物の視線は周囲を眺め渡して一箇所に固定されない。その結果、「返照」による一時的な周囲の明るさを最後に、後はだんだんと薄暗くなつていき、やがて闇ばかりが残るという巨視的な風景を描くことになる。

王維の「鹿柴」は「返照」ではなく「返景」の語を用いるが、夕日の光が照らす対象が「深林」の中の「青苔上」とかなり狭い範囲に限定され、その薄闇に浮かび上がる明るさを風景の中心に置く。王維のこのような表現は極めて早い例であつて、むしろ例外に近いと言つてよいのではなからうか。例外に近いけれども、「鹿柴」が極めて優れた作品であつたことと、「返景」の語が作り出す風景が『唐詩選』の嗜好に合致したことのために、後世の我々が持つ「返景」「返照」のイメージの形成に大きな役割を果たしたのである。

二 杜詩中の「返照」

詩語としての「返照」が杜甫以前と杜甫以後とは様相をやや異にすることが分かつた。また、杜甫前後の頃から夕日の光が照らす対象を描くようになり、その対象を風景の中心に置く表現が王維に見られるけれども、これはむしろ希有な例であることを確認した。そこで、杜甫自身の「返照」の用例について、もう少し検討してみたい。杜甫の詩には「返照」が六例見られる。この六例についても向島氏が前掲書で検討しておられ、屋上に屋

を架すの感があるけれども、次にその六例を挙げる。

①前軒類反照 前軒 反照 類れ

巉絶華嶽赤 巉絶として 華嶽 赤し

(杜甫「白水崔少府十九翁高齋三十韻」)

天宝十五載(七五六)、この年の六月に至徳と改元)、白水
県での作。「南側の軒先では夕日の光が衰えたが、切り立
つ山は赤く染まっている」と、山麓にはもう夜の闇が迫
りつつあるのに、山頂付近にはまだ明るさが残っている
という、山中特有の夕暮れを写実的な筆致で描く。この
「反照」、夕日そのものの意かもしれない。

②漁人網集澄潭下 漁人 網は澄潭の下に集まる

估客船随返照来 估客 船は返照に随ひて来たる

(杜甫「野老」)

上元元(七六〇)年、成都にあつての作。「商人の乗った
船が夕日の光といっしよに西からやつて来る」と、船が
夕日を背にして川を下つて来る様子を描く。

③孤城返照紅將斂 孤城 返照 紅 將に斂まらんとし

近市浮煙翠且重 近市 浮煙 翠にして且つ重なる

(杜甫「暮登四安寺鐘樓寄裴十迪」)

上元二年の作。四安寺は蜀州新津県にあつた。鐘楼上か
らの眺望だろう。「新津県城を照らす夕日の紅い光が今に
も消えようとしている」、暮れなずむ町の様子を描く。裴
十迪は王維の友人である裴迪のこと。

④返照入江翻石壁 返照 江に入りて 石壁に翻り
帰雲擁樹失山村 帰雲 樹を擁して 山村を失ふ

(杜甫「返照」)

「はじめに」で言及した。大暦元(七六六)年、夔州で
の作。

⑤返照斜初徹 返照 斜めにして初めて徹り

浮雲薄未帰 浮雲 薄くして未だ帰らず

江虹明遠飲 江虹 明かにして遠く飲み

峽雨落余飛 峽雨 落ち余して飛ぶ

(杜甫「晚晴」)

これも大暦元年、夔州での作。これも雨上がりの夕暮れ
の景。「夕日の光が斜めに射し、ようやくどここまでも届く
ようになった」。「徹」は透徹の意。成善楷「杜詩箋記」
(巴蜀書社 一九八九)は「明」と訓じている。

⑥返照開巫峽 返照 巫峽を開き

寒空半有無 寒空 半ば有無

(杜甫「反照」)

大曆二年、やはり夔州での作。

このように杜詩中の「反照」を制作年の順に並べてみると、面白いことに、①〜③のグループと④〜⑥のグループとに分かれるように見える。①〜③のグループは「頽」「斂」といった語とともに、風景全体がだんだんと暗くなつていく様子を描き、夕日の光が照らす対照もそれほど狭い範囲に限定されていない。このグループの「反照」は右に見た駱賓王や孟浩然の作に近いイメージで用いられている。④〜⑥のグループは夔州期の作だが、「入」「徹」「開」といった動詞が「反照」に躍動感を与える。④と⑤は俄雨の後、雨雲の隙間からさあーと射し込む夕日の光を捉え、暗中の明を際立たせている。

⑥の「返照開巫峡」は少し分かり難い。『九家注』卷三十二は「開、則開豁之義。」とする。元・趙沅(『杜律趙註』卷下)が「日落巫峡当暗、今不暗、是反照開之也。」

(日 落ちて 巫峡 当に暗かるべきに、今 暗からざるは、是れ反照 之れを開くなり。)とするのは、「開」を「不暗」の意で解したことになるだろうか。『漢語大字典』は「開」字の条に杜甫のこの詩を引き、「明朗」との字義を示す。『杜臆』卷九が「巫峡最高、故返照能開之。」

(巫峡 最も高し、故に返照 能く之れを開く。)と、①と同様に夕日の光が高い所を照らす様とするが、「開」そのものには言及しない。文脈からして姿を現すくらい

意味だろう。杜甫もしばしば夔州を山中の孤城と言っており、「巫峡最高」にも根拠がないわけではない。『詳注』卷二十が「巫山将暮、得返照而景色重開、起語卓然。(巫山 将に暮れんとし、返照を得て景色 重ねて開く、起語 卓然たり。)」とするのは、美しい眺めが今一度眼前に現れた、というような意味だろう。鈴木虎雄氏は「てりかへしのために巫峡があらはれでた」と解しておられる。これらの解釈には細かなニュアンスの違いがあるにしても、杜甫が描こうとしたのは夕日の光を受けた巫峡が夕闇の中に再び浮かび上がる様だっただろう。

④〜⑥、即ち夔州期の杜甫が「反照」を描く時、彼は敢えて夕日に背を向ける。①〜③までの杜甫には見られなかった姿勢である。夕日に背を向けることがあったとしても、それは自覚的なものではなかった。夔州期の杜甫は周囲の暗がりの中から淡いスポットライトを浴びたように再び出現した夕日の光が照らす対象にじつと目を注ぐ。

なぜ夔州の杜甫が夕日に背を向けたのか。今のところ説得力のある解答を用意できていないのだが、ただ杜甫には夔州の夕景が非常に美しく感じられたのだろうとは想像できる。李白が

朝辞白帝彩云间 朝に辞す 白帝 彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵 一日にして還る

(李白「早発白帝城」)

と詠ったのは朝焼けの風景だが、この地は三峽の入口にあり、白帝城の辺りから東を眺めると、門のように見える高く切り立つ崖と崖との間に長江が流れ込んでいく。左右を崖に挟まれた川幅の狭い長江が西から東へと流れ、

見る側の位置にもよるだろうが、朝日や夕日は南北の崖の狭い隙間から上り、また沈んでいく。夕暮れ時の風景を描こうとした時、自然と視線が巫峡の方へ向けられることになったのかもしれない。そうすれば、当然のことながら、夕日に背を向けることとなる。

また、この時期の杜甫は月と長江の組み合わせを執拗に詠い、取り分け川面に映る月の光に着目し、光と影とが織り成すたゆたうような繊細な風景を詩的言語によって定着させようと試みているように見える。「はじめに」で言及した「月円」詩でも月と長江を描いていた。④の「返照」の表現はそのような試みの一環として捉えられるのではなからうか。夕日の光が照らす対象をじつと見据え、光と影のアンサンブルを捉えようとしたと考えられるからである。

さらに、やはり夔州期の作である「解悶十二首」で、

熟知二謝将能事 熟知す 二謝の能事に将ちかきを

頗学陰何苦用心 頗る学ぶ 陰何の苦しみて心を用いしを

(杜甫「解悶十二首」其七)

と詠じていることなどから、この時期の杜甫が何遜(四六七?~五一八?)、陰鏗(五一~五六三)を高く評価し、六朝後期の詩に対する興味と関心を深めていたのではないかと考えられることも関わりがあるだろう。そもそも「返照」の語そのものが六朝後期から詩に用いられるようになったわけであるから、夔州期の杜甫の詩に「返照」が集中的に現れることになった背景に、何らかの形で六朝後期の詩からの影響があったとしても不思議ではない。

三 六朝詩中の「返照」「返景」

「返照」の語は六朝詩にほとんど用例を見出せない。遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』が北周・孟康の作とする例などは、

先汎扶桑海 先づ汎かぶ 扶桑の海
返照若華池 返って照らす 若華の池

(孟康「詠日応趙王教詩」)

対句から考えても、この「返照」は語として熟していない。そもそもこの詩は、『初学記』巻一、『文苑英華』巻百五十一に隋・康孟の作として収めるのに対し、『古詩紀』巻百二十二が題下に「然隋無趙王、故列於此。(然れども隋に趙王無し、故に此に列す。)」と注して北周・孟康の

作とし、どうも来歴が判然としない。「若華」は日の沈むところを生えているとされる若木の花。これ以外に「返照」の例を求めると、北齊・魏収（五〇六〜五七二）、北周・庾信（五一三〜五八二）の二例くらいしか見当たらない。

樹静帰煙合 樹 静かにして 帰煙 合し
簾疎返照通 簾 疎にして 返照 通る

（北齊・魏収「後園宴樂詩」）

月懸唯返照 月 懸かりて 唯だ返照あり
蓮開長倒垂 蓮 開きて 長く倒垂す

（北周・庾信「北園新齋成応趙王教詩」）

魏収は「カーテンは目が粗いので夕日の光が射し込んで来る」と「返照」を夕日の光の意で用いる。穏やかな風景ではあるが、「返照」の語の持つ意味内容を充分には活かし切れていないと感ぜられる。庾信の作は建物を裝飾する璧玉の華麗さを月と夕日の比喩で描写したものである。魏収の方は駱賓王の「返照」に近いイメージで用いているが、庾信の「返照」は叙景ではなく、唐詩への連続性を認めにくいようである。

調査の対象を「返景」にまで広げると、古い例として梁・任昉（四六〇〜五〇八）の作が見付かる。

交柯溪易陰 交柯 溪 陰り易く
反景澄余映 反景 余映澄む

（任昉「落日泛舟東溪詩」）

この「反景」は「倒景」の意だろう。東溪の水面に転倒して映る「落日」を描く。優れた風景描写だと思いが、夕日の光に照らされる対象を風景の中心に置いたものではない。次の梁・劉孝綽（四八一〜五三九）の例は王維「鹿柴」に直接の影響を与えたのではないかという指摘が向島氏によってなされている。

反景入池林 反景 池林に入り
余光映泉石 余光 泉石に映ず

（梁・劉孝綽「侍宴集賢堂応令詩」）

待宴詩の最後の二句である。宴の終わりの合図が告げられ、一抹の寂しさを湛えた叙景で一篇をまとめる。王維の色彩感覚豊かな表現には及ばないが、何よりも「入る」という動詞を用いて暗から明への変化を捉えている点で、やはり優れた風景描写と言って差し支えないだろう。劉孝綽にはもう一例、

秋江凍雨絶 秋江 凍雨 絶え
反景照移塘 反景 移塘を照らす

（梁・劉孝綽「上虞郷亭觀濤津渚学潘安仁河陽泉詩」）

とある。読みにくいのが、「移塘」は「謬塘」、枝分かれした堤防。『説文繫伝』巻五・言部・謬に論が見える。対句になつていないが、これも水辺の夕暮れを詠う。しかも、「凍雨絶」とあることから雨上がりの風景であることが分かる。「移塘」が夕日の光に照らされる対象として描かれる。右に庾信の「返照」を引いたが、「返景」の用例もある。

夕陽含水氣 夕陽 水氣を含み

反景照河隄 反景 河隄を照らす

(北周・庾信「同顔大夫初晴詩」)

「河」、「移」に作るテキストもあり、その場合は右の劉孝綽とほぼ同じ句になる。こちらは上句と合わせて対句を構成し、水辺の、詩題に「初晴」とあることから明らかだが、雨上がりの光景を描いており、唐詩の先駆けと言つてよいと思う。最後に陰鏗の例を挙げる。

重簷寒露宿 重簷 寒露 宿り

返景夏蓮開 返景 夏蓮 開く

(陳・陰鏗「新成安樂宮」)

異同が多いので、ひとまず『文苑英華』巻百九十二に従つておく。安樂宮の壮麗な様を詠う。「夏の蓮が夕日の光

を受けて花を咲かせる」と、やはり水辺の夕暮れである。早朝に咲くはずの蓮の花に夕日が当たるといふのは、些か奇妙なので、「丹井」に作る方が正しいかもしれない。

「返景」の語の方は、劉孝綽と庾信の作が唐詩を準備する表現を発見していた。彼らは、「入る」という動詞と組み合わせたり、雨上がりの景色を描いたりすることによって、暗から明への変化を見事に表現した。しかし、唐詩では、王維の「鹿柴」という優れた例外があるものの、劉孝綽と庾信とが獲得した成果が「返景」に引き継がれることなく、「返照」の方に受け継がれていった。

杜甫は「返景」を用いず、「返照」の方を選んだわけだが、このこと自体が「返照」に「詩語としての洗練が加えられたのは、杜甫に依るところが大きかった」ことと表れだと言えらう。

一方、杜甫がなぜ「返照」を選択したのか、理由はよく分からない。現時点ではどのようにすればその理由を明らかにできるのかすら見当がつかない。また、六朝詩には夕日に背を向け、夕日の光が照らす対象を風景の中心に置くという表現は見当たらなかった。やはり杜甫の独創なのだろうか。

おわりに

もちろん「返景」「返照」の語を詩中に用いなくても夕景を描くことは可能なので、「返照」という詩語を用いた場合に限定すれば杜甫の独創ということになるが、作中

人物が夕日に背を向けるという設定は杜甫以前にもあるかもしれない。例えば、陳後主の「臨高台」は、

晚景登高台

晚景 高台に登り

迴望春光来

迴かに春光の来たるを望む

霧濃山後暗

霧 濃くして 山後 暗く

日落雲傍開

日 落ちて 雲傍に開く

煙裏看鴻小

煙裏 鴻かちの小さきを見る

風来望葉回

風 来たりて 葉の回るを望む

臨窗已響吹

窗に臨めば 已に響吹あり

極眺且傾杯

極眺して 且く杯を傾けん

(陳・後主叔宝「臨高台」)

と、夕景中の人物を意図して東に向かせている。沈国儀氏は、「這首詩模擬擬樂府民歌的手法、塑造了一箇辺塞征戍將士的形象、意蘊悠遠、清新可愛、完全称得上是後主詩中難得的佳制。(この詩は樂府民歌の技法を模倣し、辺塞を守備する將士の人物像を作り上げて、含蓄に富み、清新で愛すべき、後主の詩の中でも得難い優れた作品だと「言える。)(賀新輝主編『古詩鑑賞辭典』北京燕山出版社一九八九)と、作中人物を辺塞守備の將兵とする。彼は高台に登り故郷のある東の方を遠く眺めやる。冬の長い辺塞なので、春の兆しは遥か東からやって来る。夕霧が立ち籠め山の向こう側は既に暗く、夕日が沈みつつある中、雲の辺りだけが「開く」。この「開く」は読みに

くい。

この樂府詩の描く風景は、杜甫が「返照」の用例①で描いた山中特有の夕暮れのそれである。日が西に傾き周囲は暗くなつたけれども、高いところにはまだ明るさが残っている。高台の上で東を遠望する將兵には、夕日の光に照らされる雲が明るく見えている。すると、この「開く」は、杜甫の用例⑥の「開く」と同じく、明るい、明るくなるといった意味で解釈できるのではないだろうか。そうであれば、対となる「暗」とも呼応する。

「返照」、また「返景」の語について検討してみると、後世の陳詩に対する評価の低さもあってか、六朝後期の詩の杜甫への影響についてはまだ調査してみるだけの余地があるのではないだろうか。筆者の手に余る大きな問題だが、一語一語ゆつくりと考えてみたいと思う。

注

- (1) 陰鏗「新成安樂宮」、『文苑英華』卷百九十二は「重簷寒露(一作霧)宿、返景(一作返井、又作丹井)夏蓮開」、『芸文類聚』卷六十二は「重簷寒露宿、丹井夏蓮開」、『初学記』卷二十四は「重欄寒霧宿、丹井夏蓮開」、『樂府詩集』卷三十八は「重寒露簷宿、返景夏蓮開」、『古詩紀』卷百九は「重欄寒霧宿、丹井夏(一作夜)蓮開」に作る。

※本稿は平成二十六年科学硏究費基盤硏究(〇)「言語実験の場としての六朝樂府に関する硏究」(課題番号二六三七〇四一

○の助成を受けたものである。